

危機を脱した世界遺産

第5回 イグアス国立公園

- アルゼンチン/ミシオネス州 1984年登録
- ブラジル/パラナ州 1986年登録登録基準はいずれも vii x

【住民との軋轢】

世界三大瀑布の一つ、イグアスの滝はそのスケールで訪れる人を圧倒する。滝を取り巻く森林はパラナ密林といわれ、ジャガーをはじめオオハシやモルフォチョウがゆったり飛び交う自然の宝庫である。インターネットで見てもらえばわかるが、その壮大なスケールを誇るイグアスの滝も開発の波は公園のすぐそばまで来ている。イグアス国立公園がまたがるアルゼンチンやブラジルでは日本と違い、国立公園内の土地を公園管理当局が所有し、公園内の全ての事柄を管理している。公園の入り口にはゲートがあり外国人は一人1600円ほどの入園料を取られる。公園内の食堂やガイドツアーは全て入札で落札した業者によって運営され、住民が勝手に公園内で物を売ったりガイドのようなことを行うことは禁止されている。管理当局は公園内の取り締まりに重点を置き、住民との関係はあまり重要視してこなかった。そのような公園に住民の生活道路が通っていたりすると話は複雑になる。現実にアルゼンチン側、ブラジル側それぞれに一本ずつの生活道路が公園内を通っているのだが、その道路は公園の自然保護を理由に舗装されず、一旦雨が降ると4輪駆動車でも通行困難になるほどぬかるむ。公園があるが故に不便を強制されているという意識が住民に根強い。幸いアルゼンチン側は公園を迂回する道路が舗装され、とりあえず住民の怒りは収まっているが、ブラジル側ではこの問題がこじれて住民の実力行使につながり、世界遺産の危機遺産リストに記載という事態にまでなった。この事態はブラジル当局



イグアスの滝
(写真も執筆者)



園内で見られる蝶の乱舞
(写真も執筆者)



公園内を通る生活道路/アルゼンチン (写真も執筆者)

が住民のための地域振興プロジェクトを立ち上げたりしたことで収束し、2年後には危機リストから外された。

【敵対関係から共存関係へ】

筆者がかかわったプロジェクトはイグアス地域の自然環境保全を目的としたものであるが、具体的には住民と国立公園を共存関係に築きあげていこうとするものである。場所はアルゼンチン側イグアス国立公園の裏側にあるアンドレシートという小さな町。イグアスの滝には年間100万人を超える観光客が訪れているが、この町には数百人しか訪れない。密林という感じではないが牧歌的な農村風景が広がっている。プロジェクトでは町のはずれに常設のテント型宿泊施設を作り、露天風呂も設置した。モニターとして3年間で100人ほどの日本の若者が訪れたが評判はすこぶよかった。住民が観光組合を組織したり、学校では環境教育を行い周辺の環境に目を向けるようになってきた。

こうした取り組みによって公園があるが故に自分達の生活も成り立っているという意識を住民が持ってくれば公園との新しい関係も出来てくる。公園当局も取り締まり一辺倒から住民との関係を重視する方向に切り替わってきた。このような共存関係を作り上げることでしか先に述べた危機遺産回避の道はないのではないだろうか。世界の遺産ではあっても住民の遺産ではないようなものにしないことが重要である。

執筆者プロフィール

山瀬 一裕 (やませ かずひろ)

財団法人 自然環境研究センター 専務理事。1948年兵庫県生まれ、東京大学農学部卒、技術士(環境部門)。アルメニア、フィリピン、インドネシア、パラグアイ、アルゼンチンでのJICA環境プロジェクトに参加。またNGOとしてマダガスカル、ミャンマー等で活動した

※イグアス国立公園は、アルゼンチン側・ブラジル側各々別物件として世界遺産リストに記載されています。危機遺産リストに記載されたのはブラジル側です。



AIU保険会社
エイアイユー インシュアランスカンパニー

A Member of American
International Group, Inc. **AIU**

〒100-8234 東京都千代田区丸の内1-1-3
旅行保険カスタマー・センター
03-5611-0799
www.aiu.co.jp/travel

AIU保険会社は、
世界遺産アカデミーの活動を
応援しています。

